

(1) 復舊後接岸荷役中の清水港 8,000 噸岸壁。

清水港岸壁復舊工事

内務省横濱土木出張所長 木津正治

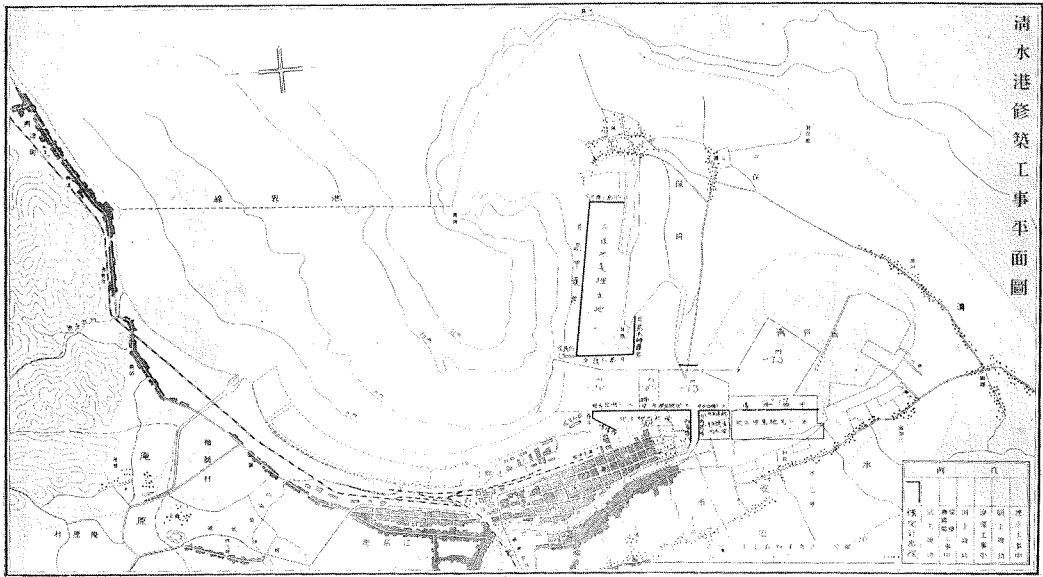
清水港修築工事の中、繫船岸壁は延長約 1,000 米、即ち 3,000 噸級 4 隻、8,000 噸級 1 隻、2 萬噸級 1 隻分を完成して居つたのであるが、昭和 5 年 11 月豆相地方地震當時、8,000 噸岸壁に被害を蒙つた爲めに、之れが復舊を要する事となつたのである。

復舊岸壁は下記諸點を考慮して、第 1 圖及第 2 圖に示す通り、横棧橋式に改築することにして、昭和 6 年 4 月に着手し、同 7 年 12 月完成、今や接岸荷役の用に供して居る。

1. 震度 2000 耗で安定を失はぬ事
2. 滑出した函塊は之を取壊すとしても非常

に困難であるから浮揚げ使用する事
 3. 同岸壁附近の地質は基面下約 20 米迄は粘土で其の下方に砂礫混りの相當強固なる層があり基面下約 30 米に至つて砂礫の硬層に達し他の岸壁に比し地盤は軟弱であるから相當強固なる基礎を必要とする事
 工事施工中、最も苦心を拂つたのは函塊の浮揚げ作業で、其の大要は第 3 圖に示した通りの装置で浮揚げる事にした。

作業方法は、先づ上部コンクリト及裏込砂利を取除き、滑出せる函塊(乙函)製函型枠を改造せる防水枠を其の上方周圍に嵌込み、完



(2) 清水港修築工事平面圖。

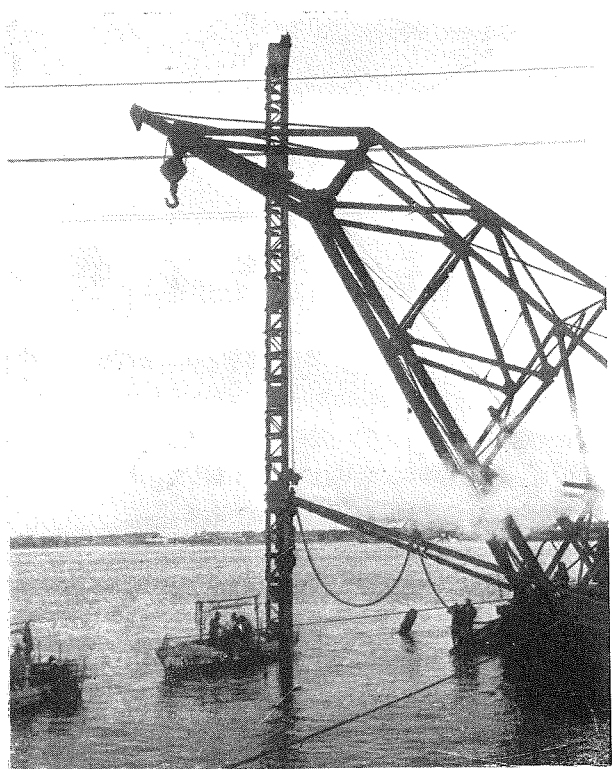
全に防水して、内部の中詰砂利と定量の中詰コンクリートを取除き、終つた後、函塊の上部に防水枠より幾分高く構桁の受臺を据付けた。

構桁は二通り浮體（甲函）上に架設し、繫鋸は上下の中間に纜手を設け、上半は構桁より懸垂し、下半は函塊の隔壁にピンで取付けて置く。

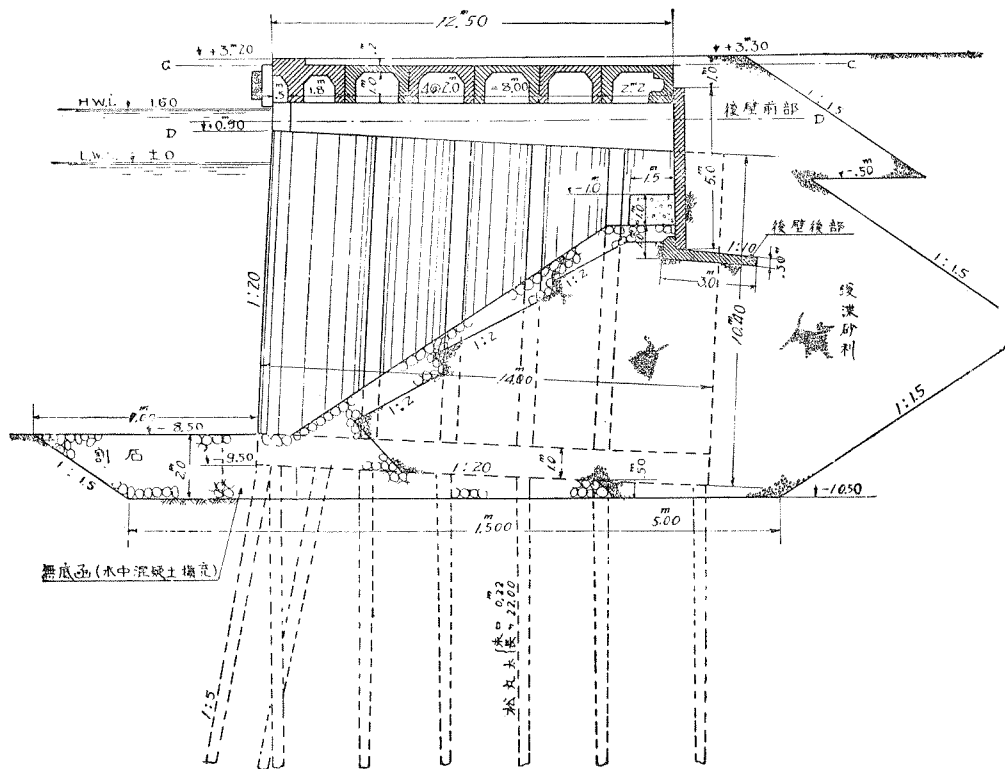
浮體には30馬力の電動ポンプを据付け、函内に配置してある鐵管によりて、各室の水位を自由に調整出来る様にしてある。

諸般の準備が全く整つたならば、浮體を曳船して浮揚せしむ可き函塊の前方に持來り、浮體内の水を調節して、函塊の傾斜にならひ沈めて行き、適當の位置に達すると、上下繫鋸の纜手にピンを挿入して之を連結せしめる。繫鋸は頭頂の螺子により弛の無い様に締付ける。

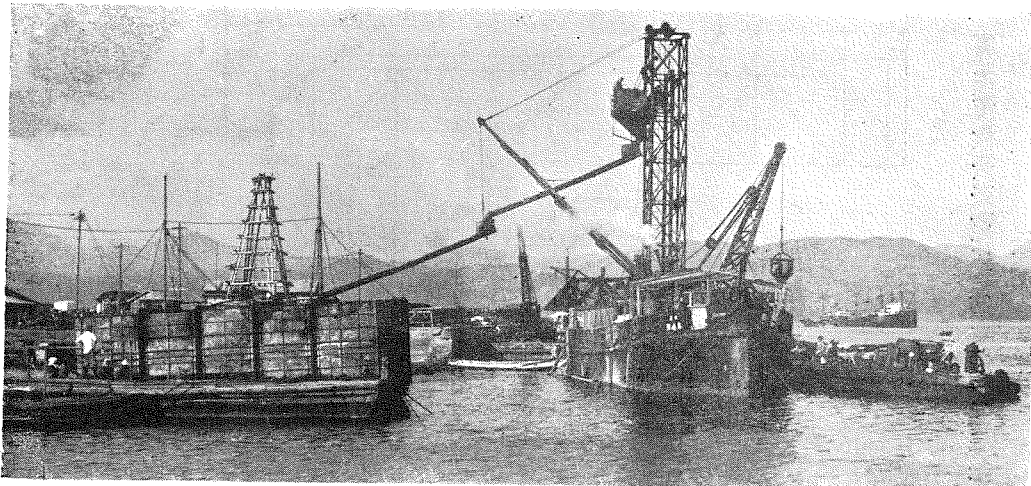
此の際、八本の繫鋸が同一程度に緊張する事を要する。而して函塊内に残留して居る水と浮體内の水を排除する



(3) 起重機の檣からハンマーリードを下げ、油谷式復動二號バイルハンマーにて基礎杭打の狀況。

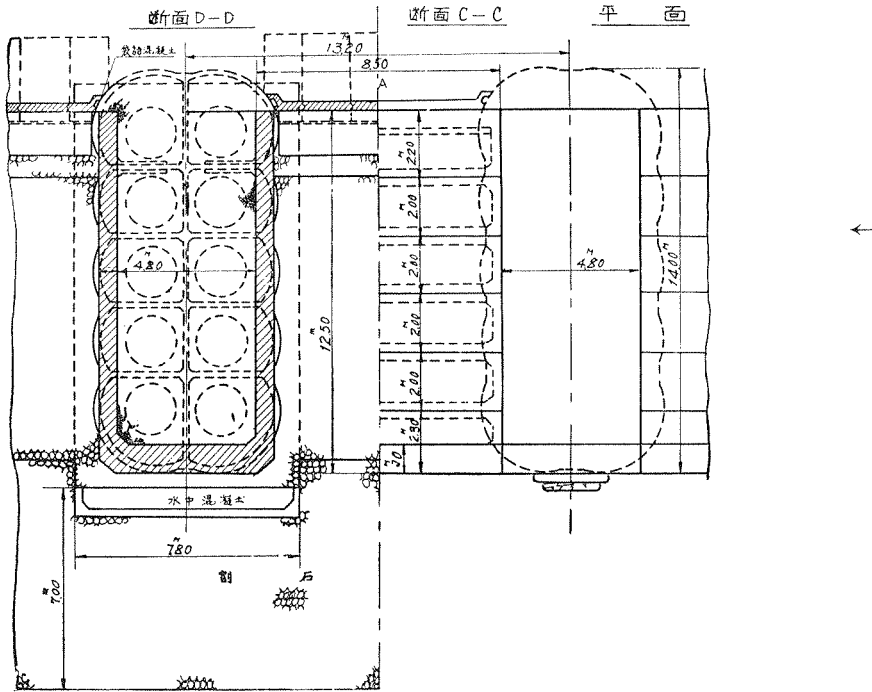


(4) 清水港岸壁復舊作業第一圖。

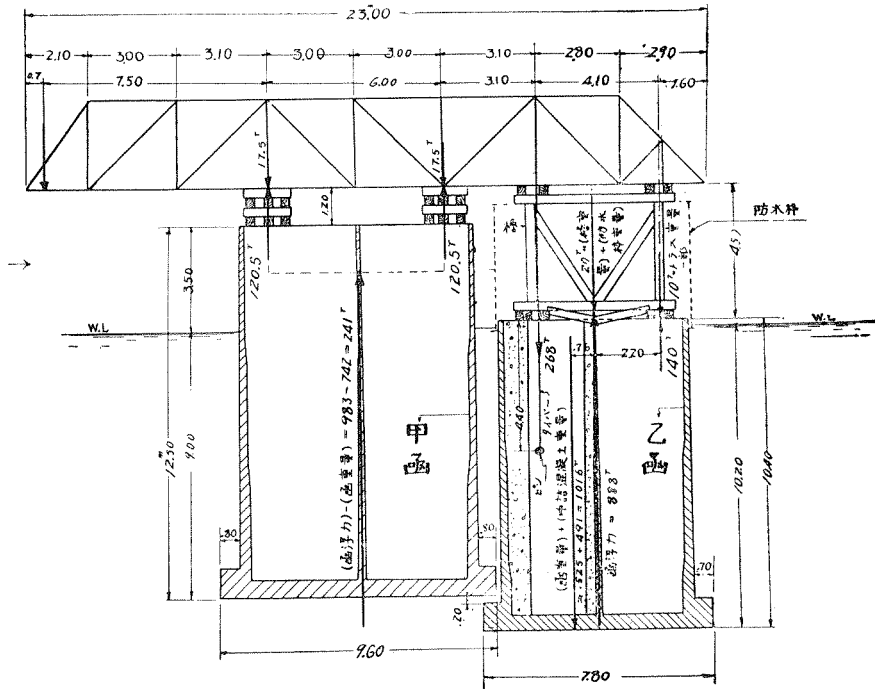


(5) 滑り出した函塊を浮揚げ所定の基礎上に据付け防水設備のまゝ中詰コンクリート作業中の状況。

(6) 清水港岸壁復舊作業第二圖。



(7) 清水港岸壁復舊作業第三圖、函塊浮揚裝置。



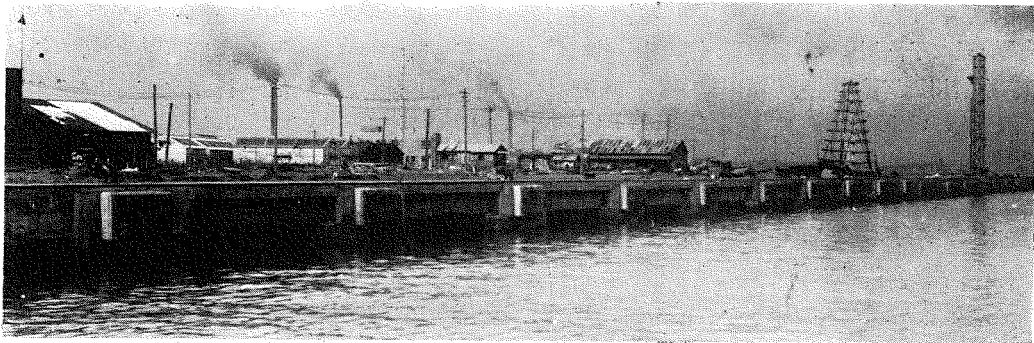
ことにより、構桁によつて連結せられたる兩者は一體となつて浮揚する。此の際多少の波浪があつても殆ど動搖せず、極めて安定であつた。

浮揚後の水平を保つ爲めには、浮体内の水を調節すればよい理であるが、吃水の點から

都合の悪い場合には、構桁の端に設けた水槽に水を入れて釣合を保たしめた事もあつた。

函塊の据付けは以上述べた方法を逆に進行し、所定の傾斜を保たしめ潮位を利用して据付、取外しを行つた。其の他の施行状況は一々記述する事を省略して寫眞に代へ。(了)

(8) 各構脚上に床桁を架し裏詰準備作業



(9) 復舊した 8.00 噸岸壁の正面。